

八千五百六十五字に上る大文章であり、蘇軾（一〇三六—一一〇一）が神宗皇帝にたてまつった「萬言書」と双壁をなす名文と謳われる。

この書は分量・表現のみならず、その内容においても鋭い社会批判を持つものであった。表面上は平穩を装いながら、実は深く腐敗した当時の社会の現状を看破し、麻痺せざる良心を有する若手政治家の悲痛な叫声として、我々の胸にも強く訴えかけてくるものがある。

本発表では、まず王安石の「萬言書」に表れた経書理解の方法の特徴を明らかにしたい。更にその王安石の独自の経書理解を通じて、彼の思想全体につながる本質にせまりたいと考える。その具体的方法として、彼と政党・学党的に対立関係にあった、蘇洵（一〇〇九—一〇六六）・蘇軾・蘇轍（一一〇三—一一二二）、いわゆる三蘇の経書理解との詳細な比較を行うこととする。

『太極図説』における「各一其性」について

博士後期課程二年 岡 野 康 幸

『太極図説』は北宋、周敦頤の思想を代表する著作であるが、後世朱熹に顕彰されたことにより、一躍南宋の思想界にて話題になるという変わった経歴を持つ。従って後々『太極図説』を読み解く際には朱熹の『太極図説解』（朱熹による注解）によって解釈していくのが正統とされてきた。

そのような最中、周敦頤の原文にある「各一其性」について朱熹の注解は「然五行之生、随其氣質而所稟不同。所謂各一其性也。」つ

まり五行（水、火、木、金、土）が発生する時には氣質に沿って受けるものが異なる、と述べている。にもかかわらず続けて「各一其性、則渾然太極之全体、無不各具一物之中、而性之無所不在、又可見矣。」と言って「太極」が「性」として全てに同じく存在しているとする。要するに、朱熹の注解は同一文中であるにもかかわらず、「性」に二重の意味が与えられている。朱熹の門弟たちも、これを疑問に思い朱熹に質問している。

本発表ではなぜ朱熹が「各一其性」に二重の意味を与えたのか検討するとともに、朱熹思想における「太極」の位置づけに見通しを立てたい。